

2019.12.08 第2主日待降節Ⅱ礼拝

ルカ 1:67-79 「ザカリヤの賛歌—救いの約束を忘れない」

聖書

67 さて、父親のザカリヤは聖霊に満たされて預言した。

68 「ほむべきかな、イスラエルの神、主。主はその御民を顧みて、贖いをなし、

69 救いの角を私たちのために、しもベダビデの家に立てられた。

70 古くから、その聖なる預言者たちの口を通して語られたとおりに。

71 この救いは、私たちの敵からの、私たちを憎むすべての者の手からの救いである。

72 主は私たちの父祖たちにあわれみを施し、ご自分の聖なる契約を覚えておられた。

73 私たちの父アブラハムに誓われた誓いを。

74 主は私たちを敵の手から救い出し、恐れなく主に仕えるようにしてください。

75 私たちのすべての日々において、主の御前で、敬虔に、正しく。

76 幼子よ、あなたこそいと高き方の預言者と呼ばれる。主の御前を先立って行き、その道を備え、

77 罪の赦しによる救いについて、神の民に、知識を与えるからである。

78 これは私たちの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、曙の光が、いと高き所から私たちに訪れ、

79 暗闇と死の陰に住んでいた者たちを照らし、私たちの足を平和の道に導く。」

はじめに

今日はバプテスマのヨハネの父親であるザカリヤの賛歌に心を向けましょう。この賛歌は第一声の「ほむべきかな」のラテン語から「ベネディクトゥス」と呼ばれています。ザカリヤの賛歌は、彼が祭司であったことからイス

ラエルの歴史を背景に歌われています。「イスラエルの神、主」「その御民を顧みて、贖いをなし」「しもベダビデの家に」「私たちの父祖たちにあわれみを施し」「ご自分の聖なる契約を覚えておられた」「父アブラハムに誓われた誓い」といったことばの背後には国の歴史があるのです。この点は先週見ましたマリアの賛歌には見られないもので、趣を異にしています。これがザカリヤの賛歌の特色とはいえ、イスラエル民族ではない者たちにとっては馴染みにくい賛歌とも言えます。しかし、決して一民族の話ではありません。イスラエル民族の歴史を通して、神さまはすべての者にご自分の御心を示して来られたのであり、そこには民族や言語を越えた普遍的なメッセージが含まれています。それを「救い（贖い）」と「契約（誓い）」ということばを中心に学んでみましょう。

1. 罪理解の相違

教会では「救い」ということばがよく使われます。イエスさまを救い主として信じる信仰告白をすることを「救われる」という言い方をしますが、一般的に使われる救いとは意味が違い、聖書が言う救いは罪からの救いが背景にあります。キリストのことを救い主（すくいぬし）と呼ぶのですが、キリストは私たちを罪から救うためにこの世に来られた方だからそう呼ぶのです。しかしながら、多くの方は自分が罪人だとは思っていません。ですから、救い主であるキリストも「私には関係ない」と言います。一般的に罪人と言ったら犯罪者をイメージしますから、国民の99.9%の方は「自分は罪人ではない」と言うでしょう。それどころか日本は世界でも屈指の治安の良さを保ち、親切で道徳的な民族ですから、罪とは無縁であると考えてるのは当然であり、ゆえにキリストにも関心がないのは当たり前です。

では、罪とは何でしょうか。罪のリストは聖書に記されており代表的な箇所はガラテヤ5:19-21とマルコ7:21-22でしょう。「淫らな行い、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、遊興」（ガラテヤ5:19-21）、「悪い考え、淫らな行い、盗み、殺人、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさ」（マルコ7:

21-22)。こうしたリストを自分の生活に照らしてみることに一定の意味はありますが、それで自分が罪人かどうかを判断することはできません。チェックシートにマークして判別するような方法で罪を定義することはできないからです。聖書が定義する罪は、神さまに背を向けて自分勝手に生きることであり、神さまを自分の人生から締め出していることが罪だと言います。神さまは私たちを祝福したく願っておられるのに、神さまの干渉を嫌い人間が身勝手に生きることによって先の様々な罪のリストとなって表れてくるのです。

このように、一般的に理解している罪（犯罪）と聖書が言う罪（神への不信仰と不服従）に大きな隔たりがあるので、聖書が提示する救いもよく分からないわけです。

2. イスラエル民族の罪

冒頭にザカリヤの賛歌はイスラエル民族の歴史が背景にあると言いました。ザカリヤは祭司として民族を代表して神さまに仕えていました。祭司は一人の人間の罪のとりなしをするとともに、民族としての罪をとりなすことも忘れてはいません。民族の罪を理解するために、イスラエルの成り立ちを大雑把に見ておきましょう。神さまはまずイスラエル民族をお選びになり、ご自分の民として祝福を注いでくださいました。その民族からすべての人々に祝福が届けられるようにご計画されました。ですから、イスラエルは神さまの祝福によって繁栄を享受し、それを人々に届けなければならなかったのです。しかし、イスラエル民族はその責任を果たすどころか神さまの祝福を自らの栄光に換えてしまい、神さまを退け自分たちの力を誇るようになって行きました。その都度神さまは民の間違いを正し、軌道修正しようと預言者を送るのですが人は聞く耳を持ちません。長い歴史を通して人間の傲慢の行き着いた先が敵国への敗北でありバビロン捕囚となり国を失うことでした（BC586年）。それが旧約聖書の歴史です。

すでに国家を失ったイスラエル民族にとってキリスト誕生前の約400年間は暗黒の時代でした。バビロン、ペルシャ、ギリシャ、ローマの支配の中で、自分たちの国を持つことなく、長い間抑圧され、搾取されてきました。それ

ゆえに敵の手から救い出されることは、彼らの希望であり、メシヤ待望論（救い主の誕生）は必然のことだったのです。すべては人間の罪の結果とはいえ、罪に支配され、苦しめられている状況を神さまは黙って見ておられるお方ではありません。苦しむ者に救いの道を用意し、キリストによってその道を示されたのです。68 節に「その御民を顧みて」とありますが、このことばには決して見捨てることのない神さまの思いが表れています。イスラエル民族としての苦悩を顧みてくださり、「わたしはあなたを見捨てない」という強いメッセージが流れているのです。イスラエル民族にだけでなく、私たちに向かってもそうです。「あなたを見捨てない。あなたを顧みる」と語っておられ、その声は今ここに一人一人に届けられています。

3. 約束を忘れない

神さまはイスラエルを顧みておられるように、私たちのことも顧みてくださっています。民族としてというより、神さまに造られた創造の作品として一人一人を顧みてくださっているのです。なぜ、顧みてくださるのでしょうか。その理由は契約（約束）にあります。

キリスト教信仰は、神さまと私たち人間との約束の上に成り立っています。神さまは私たちを創造し愛すると約束されました。私たち人間は造られた者として神さまを愛して神さまに従って生きることを約束しました。この両方の約束が成り立っているとき両者の関係は平和であり良好です。でも、この約束が人間の都合で破られると関係が不安定になり、壊れた状態が先ほどの罪の状態となるのです。

私たち人間は約束を破ることはあっても、神さまの側から約束を破ることは決してありません。「主は、…ご自分の聖なる契約を覚えておられた。私たちの父アブラハムに誓われた誓いを。」(72, 73 節)とあるように、神さまは人と結ばれた契約を忘れることはないのです。この 72, 73 節のことばは、創世記 22 章の神さまがアブラハムに愛するひとり息子イサクをささげなさいという試練をお与えになったときのことを指しています。アブラハムは神の仰せに従って、刀で息子イサクを屠ろうとします。その瞬間神さまは「その

子に手を下してはならない。その子に何もしてはならない。今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく分かった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった。」(創世記 22:12) と言って、アブラハムの手を止めてくださいました。そして「あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。」(同 22:18) と約束してくださったのです。その時の約束を神さまは忘れてはおられず、アブラハムの子孫としてキリストを誕生させてくださいました。

アブラハムは紀元前約 2,000 年頃の人ですから、神さまはキリスト誕生までの 2,000 年間、アブラハムの子孫を祝福すると約束された約束を頑なに守り続けておられたのです。あまりにも長い時間なので、私たちには理解できないのですが、キリストの誕生をもって神さまの約束の確かさが証明されました。神さまがかつてアブラハムに約束された子孫の祝福は、キリスト誕生から 2,000 年経つ今も有効で、ご自分を信じる者を祝福してくださっています。今イエス・キリストを救い主として信じる人々が世界のあらゆる国に起こされていることは、神さまが約束を忘れておられないことの証拠です。それゆえに神さまの祝福を受け継ぐ者がアブラハムの子孫と言われるのです。

結び

ザカリヤの賛歌は神さまの約束の確かさと神さまの真実さを私たちに教えてくれます。神さまは一人一人にみことばの約束を与え、祝福してくださるお方です。今まだそれが実現していなくても、神さまは約束を覚えておられ、時が満ちたときに事を成し遂げてくださいます。なかなか物事が良い方向に進まないときも、神さまは「あなたのことを忘れてはいない」と仰っておられることを覚えてください。そして必ず私の内に神さまの祝福は実現すると信じて、希望をもって歩んで行きたいと願います。神さまの祝福をお祈りします。